

宮古訪問プログラム参加生徒のレポート

1. 課題：震災直後と現在、どのように復興活動をしていくのか、宮古の形が思い描く未来、それをふまえて東京にいる私・高校生にもできることを考える(2年女子)

課題として挙げた高校生の自分にできることを2つ考えました。1つ目は手紙を通じての交流(ペンフレンドなど)です。体が不自由で家外に出ることが困難な人であっても紙に文字を書きポストに投函することで誰かとつながることができます。思いついたきっかけは赤沼さんの被災者の方が今必要としている支援の形についてのお話と、春の Global Week で行われたフィリピンのレタープロジェクトからです。被災地の方達は「大変ですね、大丈夫ですか、頑張ってください」という偽の同情よりも普通の会話ができる相手こそが自分とつながった存在とじてくれるのではないかと思います。私はカウンセラーではないので専門的な心のケアをすることができませんが、手紙を通しての交流をきっかけに相手の方が社会とつながっていると感ずることができないのではないかと思います。2つ目はかるたの制作です。私の考えた“宮古カルタ”は宮古の観光名所や名物といった都の魅力についての古くから津波の被害を受けていたからこそ語り継がねばならない教訓の詰まったカルタです。大きな案はこの2つですが実現するのは難しいと思います。しかし今回宮古訪問プログラムに参加したことによって被災した方達から直接お話を聞き、1番痛感した被災した方たちに私達は寄り添えていない点が多くあります。この問題を忘れずに、宮古の人が(苦しい思いもあるなかで伝えてくれた)教訓や思いを正しく受け止め、どのように向き合えば良いのか考え続ける必要があるのだと思います。また今回学んだことはまだまだ氷山の一角にすぎないのだということを忘れず、これからも“風化とは?”“復興とは?”という課題について氷山の一角の部分から少しずつ面積を広げ、より現場に寄り添った答えを見つけられるように学び続けます。

2. 課題：被災者の方々に実際に会って震災直後の心境やボランティア活動の実情などを聞きたい。またそこから「支援」ということを考えたい。(3年女子)

“「支援」はものやお金、労働力の提供だけではないのだ”という赤沼さんのこの言葉は私が以前から考えていた「精神的支援」という事柄に通じるものがあり深く共感した。だが、その次の「そのために被災者と非被災者という隔たりを埋めたい。誰かがリーダーシップをとって被災者・非被災者といった枠を超えた支援を積極的に行うことで両者が共に震災を思い出し、想いを共有することが出来る」という赤沼さんの言葉に私は驚いた。考えてみると、私は今まで「私は被災していないから被災者の方々の気持ちを完全には理解することが出来ないかもしれない」「私は被災していないから被災者の方々が本当に望んでいる支援というものが分からないかもしれない」という不安な気持ちが心の片隅にあり、この不安が直接的・積極的支援を行うことを躊躇させていたように思う。しかし、「配慮」の思いからこちらが勝手に作ったそのような隔たりは被災者の方々からすると心の距離を置かれたように感じるものであり、実は不要なものであったのだということに気がつき目から鱗が落ちた。確かに被災者の方々に寄り添い配慮しようという気持ちは大事であるが、「被災者だから～」といった遠慮は支援には必要ないのだということを深く感じた。また宮古北高校での「風化させないために」のディスカッションの発表で挙げられたインターネットを使った被災地の情報発信などは高校生の私達にも、だれにでも出来る「被災者・非被災者といった枠を超え両者が共に震災を思い出し共有するための支援」であると思った。「私は非被災者だから～」と消極的になり躊躇せず、自分に出来ることを小さいことでも少しずつ行うとい

宮古訪問プログラム参加生徒のレポート

うことこそが真に「被災者への心に寄り添った支援」であると感じ、この経験をきっかけに、これからは私も被災地を応援する者の一人として積極的に自分ができる支援を行ってゆきたいと思う。

3. 課題：宮古訪問を通じた東北の現状の再確認と将来、新たな震災が起きた時にどのように対応をするべきか。また東日本大震災に対しての自分達がこれからできる社会貢献とはなにか(3年男子)

社会貢献について。これに関しては3日目にイカ王子(鈴木良太さん)の話を聞いてとても感動したことが課題につながると考えている。話が大きくそれるが、自分はこのまま大学へ進み、そこそ勉強してどこかの企業に就くのが怖かった。なぜなら本当に自分が好きでその人生を歩むならまだしも、お金を稼ぐためだけに働くのが嫌だからだ。そんな心情の時に、イカ王子の話を聞いた。震災があってから、宮古の人は復興しようと自分の仕事に命をかけて、本気で向き合っている。そして自分たちの仕事に誇りを持っている。その人達をみて、素直に格好良くて憧れた。自分が今年やっと地元の福島にかえって、地面に足をつけることが許されたのも、宮古の方々と同じように復興しようと仕事に取り組んだ多くの人がいるからだ気づいた。仕事に熱をもつ人になりたいと思った。将来、復興関連の仕事について、直接的な社会貢献がしたいと、宮古訪問が自分に気づかせてくれた。

6. 課題：震災に遭われた方の生の声を聞き、震災が起きてから現在までの体験や考え方を知り、今被災地に必要なことは何か、青山学院高等部に通う1生徒としてできることは何かを見つける。(3年男子)

高台移転した方のお話では、今必要なものは私たちのような意見や悩みを聞いてもらえる若い人と言っていました。より多くの人がこの被災地を訪れて被災地の事について知ってもらうこと、同じ過ちを繰り返さないように出来る対策は全てすることこそが話を聞いた私がすべきことだと思いました。

人間は忘れてしまうものなので風化してしまうのは仕方が無いことなのかもしれません。しかし、東日本大震災で起きたことは同じ過ちを起こさないためにも後世に語り継がなければならないことだと思います。かつてのチリで起きた地震は津波の前の引き波を珍しい光景であると避難せずに集まってきたせいで余計に死者が出てしまいました。それは知識不足によって引き起こされたもので、知識があれば亡くなることの無かった命です。地震大国の日本だからこそ地震や津波から生き延びる術を世界に発信していくべきだと思います。私が今できることは多くの人に訪問プログラムで学んだこと、思ったことを伝えることと多くの人に被災地へ行ってもらえるようにすることだと思いました。まずは自分の家族と災害時にどうするかを話し合い、SNSなどで発信するなどができると思います。毎年文化祭の学校紹介ブースの隣で宮古北高校との話し合いで作成した模造紙を貼りだしていますが、それだけでは足りないと思います。今回の訪問プログラムでは参加者で役割分担をしているので記録してくれたものを掲示したり、宮古の美しさを写真で伝えたりなどいろいろなことが出来ると思います。文化祭やグローバルウィークを通して生徒や参加者が一人でも多く宮古について知ってもらえることを願っています。